

ディスコグラフィー掲載

ディスコグラフィー【2017No.77】(HP 掲載)

分類：CD

作曲家：Gustav Mahler

曲名：Symphony No. 1 in D major

演奏：Fabio Luisi 指揮 Wiener Symphoniker

発売：NML

No.：WS001



[ウィーン交響楽団と樫本大進のコンサート](#)で買い求めてきたもので、演奏のときとは指揮が Fabio Luisi に替わっています。ネット上の解説を下記に引用します。

「AllMusic Review by Blair Sanderson

Fabio Luisi and the Vienna Symphony make a valiant attempt at performing Gustav Mahler's Symphony No. 1 in D major, but this recording is a middling effort that is easy to pass over in favor of much better recordings. While the musicians play with warmth and charm, it seems the orchestra as a whole is not fully prepared to perform this demanding score, especially in exposed passages where imprecise playing and faulty entrances are obvious. Careful listening reveals uneven spots in the opening string harmonics, some slip-ups in the woodwinds' falling fourths, and rhythmically loose fanfares, even before the symphony has reached the three minute mark. Similar execution problems occur throughout, but to the untrained ear, they may be easy to ignore if the interpretation is interesting enough. There is some musicality in this rendition, and Luisi is adept at finding the right expressions, even when the technical aspects of the performance are a little rough. But one must remember that this is the rough and ready Vienna Symphony,

not the polished Vienna Philharmonic, so expectations should be adjusted accordingly. Also bear in mind that this is the orchestra's own label, so the sound is adequate for a CD but nothing special. With many superior recordings available on the major labels, there is no reason to settle for this average version.

Recording Date May 30, 2012 - May 31, 2012

Recording Location ORF Radio Kulturhaus, Vienna, Austria」

「ウィーンの歴史あるオーケストラの一つ、ウィーン交響楽団は、1900年、フェルディナント・レーヴェによりウィーン演奏協会管弦楽団 (Wiener Concertverein Orchester) として設立され、1903年2月11日、ムジークフェラインザールにおいて、レーヴェ指揮によりブルックナーの交響曲第9番の初演を行いました。1913年、本拠地をウィーン・コンツェルトハウスとし、1919年、ウィーン・トーンキュンストラ管弦楽団と合併、1933年、現在の名称となり現在に至っています。第2次世界対戦の戦禍を潜り抜ける際、一度は消滅の危機にありながらも、戦後復活し、日本を含めた世界ツアーを行うなど活発な活動をしていて、ファンも多いオーケストラです。歴代の指揮者たちの顔ぶれも見事であり、スワロフスキー、サヴァリッシュ、クリップス、ジュリーニ、ラインスドルフ、ロジェストヴェンスキーなどの大御所の名前が並ぶ様は、まことに壮麗です。首席指揮者の任にはありませんでしたが、あのカラヤンも「ウィーン演奏協会音楽監督」として、このオーケストラの発展に力を注いでいます。最近では1982年からエッシェンバッハ、プレートル、デ・ブルゴス、フェドセーエフとバトンが繋がれ、2005年からはファビオ・ルイーゼが首席指揮者の地位にあり、レパートリーの一層の拡大と表現の充実を図っているのはご存知の通りです。

今回、オーケストラは新たに新レーベルを設立し、そのリリース第1弾として所縁の深いマーラー (1860-1911) の第1番をお届けいたします。豊かな歴史に裏打ちされた響きに、現代的解釈を施すルイーゼの棒によるマーラーの青春記。まさに新星レーベルの誕生にぴったりの作品、かつ演奏です。音へのこだわりも感じさせるLP2枚組も同時発売。音楽を愛する全ての人への素晴らしい贈り物です。」

再生は、EMT981→CCV-5→SWD-DA20の経路で行い、EMT981にはGPS-777から44.1KHzのクロックを、CCV-5にはGPS-777から96KHzのクロックを入力しています。また、今回、新たに購入したデジタルアキュライザーDACU-500をSWD-DA20の入力端子に挿入しています。

演奏のときは指揮がフィリップ・ジョルダンからファビオ・ルイーゼに替わっていますが、紛れもなくウィーン交響楽団の音がしています。すなわち、高域は艶やかに、低弦が分厚く、金管と打楽器は爆発的に炸裂します。大編成オーケストラの迫力をここまで出せるのはDACU-500の効果も寄与しているように思われます。DACU-500については別途オーディオ実験室のページで紹介いたします。

以上